「移行性」と「滞留」
『海辺の墓地』に見るヴァレリー詩学の一面

"Transitivité" et "Séjour" — Un Aspect du poétique valéryen dans *Le Cimetière marin*

天野　利彦
Toshihiko AMANO

（平成18年9月13日受理）

少年期より関わってきた詩的言語の省察からポール・ヴァレリーは、詩語の性質であるとともに、言語活動一般を可能ならしめる本質として、言語における「移行性」を見出し、その具体的諸相を『カイエ』に記録した。彼はその特徴を自家薬篭中のものとして駆使すべく、一度放棄した詩作を再開し、矛盾に満ちた言語の「移行性」から目を逸らすことなく考察を深め、幾多の名詩を紡いできた。

『海辺の墓地』では、そのような言語の「移行性」を逆手に取り、その「移行性」を剥き出しにするかのように、意図的に、多義的な象徴言語を駆使し、絶えず変化する多層的な詩的世界を表わすと同時に、詩の構造そのものにおいても、無限の反復運動を惹起する連環的構造を企んだ。

その結果としてこの詩では、言葉の内部と外部で無限に続く移行の過程において、一見、移行そのものが停滞する、そんな静止的印象を生み出す2つの特権的な場面が描かれることになる。そのひとつは、反復の永遠性が元となって生じる全体性の印象において、効果として生まれる静止であり、他方は、多方向の力が極限状態で、調和に達した瞬間に訪れる静止である。いわば反復的永遠性の静止と、調和的静止とである。

はじめに

20世紀で最も晦渋な詩の一つとされる『若きパルク』*La Jeune Parque*(1)を、およそ20年(2)にわたる詩作放棄ののちに書いた詩人、ポール・ヴァレリー。彼の詩学の秘密を明らかにするべく、その特異な言語観を探求し、思想を振り返ってみると、たとえば《Implexe》（通常、「錯綜体」と訳されている）というような彼独自の仮説構築上の作業概念が、実は重要な役割を演じていたことがわかる。(3) 筆者が長く考究を重ねてきた《Transitivité》（これまで「移行性」という訳語を与えてきた）という概念もまた、そうした鍵概念のひとつである。(4)

この「移行性」という概念は、簡潔に述べれば、本質的異質性を孕んだ複数の領域を横断する力の謂であり、とりわけ言語活動それ自体を可能ならしめる本源的な現象であることが、解明されてきた。すなわち、この「移行性」の達成こそが、その都度の言語活動の成就であり、その挫折は言語活動の不可能性を意味している。そして「移行性」の達成と挫折がもたらすものを知るために、筆者は、「移行性」の遂行機序にも、分析を加えてきた。(5)

その分析の過程で、新たな研究課題が生まれた。それは「移行性」の、達成でも挫折でもない、「滞留」ともいうべき現象の可能性である。それは、『テスト氏との一夜』*La Soirée avec Monsieur Teste*(6)で彼が描いた、眠りに落ちてゆく人間の意識の薄明の領域、『若きパルク』で詠った目覚めの瞬間の意識と感覚の覚醒過程、また各種のエッセイで臆することなく彼が開陳した、夕簿と夜明けの時間帯への彼の偏愛にも関わるはずでもあるテーマといえる。小論では、この問題に焦点を合わせ、ヴァレリーの特異な思想を理解するために、新たな作業概念として「滞留」という概念を提起し、詩学的分析におけるその有用性の一端を、世上、最も知られた彼の詩のひとつである『海辺の墓地』*Le Cimetière marin*において、明らかにしてみたい。

達成された「移行性」

『海辺の墓地』は、次の詩句から始まる。「この静かな屋根、そこに鳩たちが歩む、Ce toit tranquille, où marchent des colombes,」。小高い丘にある墓地から見える「この静かな屋根」と呼ばれているものは、実は海であり、屋根の上を歩んでいるかに見える「鳩たち des colombes」とは、波に揺られる船のことである。事実、第4詩句においては、「海、海、常に繰り返される La mer, la mer, toujours recommencée」…と、一見静謐な屋根に見える海が、内に不断の反復運動を蔵していることが明かされる。海のもつ、この静と動の2つの姿。

さらに、詩人の眼差しにさらされた海のもつ、この静と動の対比、二重性は、この詩の最後の2行である第143および第144詩句において、劇的に高揚した調子をもって、描かれる。

> 砕けよ、波！歓喜に満ちた水で砕け、
> 鳩の群れの啄む、この静かな屋根を！
> Rompez, vagues! Rompez d'eaux rejouies
> Ce toit tranquille où picoraient des focs!

荒々しい波の、しかし生の息吹に満ちた力で、硬い固体でできた屋根のごとく落ち着き払った海の眺望を、もう一度、ありのままの姿に戻そうとするかのようであるが、一方で、最後の詩句における「この静かな屋根」は、読者を、この詩の最初の詩句に送り返しもするのである。そうして、この詩全体が、ひとつの纏りであると同時に、何度も繰り返して始めに送り返す、反復運動を蔵した「移行性」の詩でもあるのである。屋根のごとき静の海から、波の逆巻く動の海へ、そしてまた動の海から静の海へ。海が内に蔵しつつ外に向かって映し出す、この永遠の反復性は、この詩全体の基本構造をなす企みといえよう。

永遠の反復というテーマは、すでに第4詩句で見たように（「常に繰り返されるtoujours recommencée」）、詩の結構の全体性においてだけでなく、その部分においても企まれている。第136－138詩句は、こうである。

絶対のヒドラ、己が青き肉に酔い、
己が煌く尾を咥え、
喧噪に似た沈黙の中で
Hydre absolue, ivre de ta chair bleue,
Qui te remords l'étincelante queue
Dans un tumulte au silence pareil

ここでもまた、海の蔵した永遠の反復運動が詠われ、5行後の詩の結末（第143－144詩句）での劇的緊張への助走となっているのであるが、また、この詩の結末そのものが、ひとつの通過点であり、仮の結末に過ぎず、読者が詩の始めに送り返されることも、すでに暗示されている。「己が煌く尾を咥えQui te remords l'étincelante queue」たヒドラHydreとは、むろん永遠の反復を象徴するウロボロス(7)の、海に住まう姿であり、「己が青き肉に酔いivre de ta chair bleue」たゆたう海の象徴であるが、煌く最終詩句を持った、この詩そのものでもあるだろう。喧噪もその極限においては、沈黙に相似たものになる。

運動の永遠と停止の永遠

寄せては返す波の動きに代表される永遠、言いかえれば、終わったと思ったら振り出しに戻る、まさにこの詩の構造そのもののような永遠、それは運動の永遠である。つまり絶え間なく繰り返される「移行性」の永遠である。

それに対して、この詩にはもうひとつの永遠、いわば停止の永遠も詠われている。それは、死の永遠であり、また、正中した太陽の永遠である。

墓地の永遠は、死の永遠であり、それは、それぞれの生の運動の完遂による静止状態である。これに対し、正中の太陽の静止状態は、充溢する生の力の極限状況における瞬間の永遠性であり、死者たちの永遠とは異なり、生の只中における時空そのものの静止状態、永遠性である。第73から第78詩句は、この2種類の停止の対比を鮮やかに描いている。

隠された死者たちは、この大地の中に休み、
再加熱され、その神秘を乾燥される。
高みの正午、不動の正午は
己の中で身を屈め、己の中で完結する
完璧なる頭頂、完全なる王冠よ、
私は、お前の中で、秘密の変容となる。
Les morts cachés sont bien dans cette terre
Qui les réchauffe et sèche leur mystère.
Midi là-haut, Midi sans mouvement
En soi se pense et convient à soi-même
Tête complète et parfait diadème,
Je suis en toi le secret changement.

全精力の只中にあって静止する正午の太陽の光は、墓石さえも震い動かし、その輝きに忠実な海の波は、動きを止める（第59－60詩句）。

そこでは、かくも多くの大理石が、かくも多くの影の上で震えている；
これに忠実な海が、わが墓たちの上で眠っている！
Où tant de marbre est tremblant sur tant d'ombres;
La mer fidèle y dort sur mes tombeaux!

その静止する正午の太陽は、時空間そのもの、すなわち世界の静止であり、その空間の中では、生身の詩人自身が変化する。（第31詩句）

美しき天空よ、真実なる天空よ、変化する私を見よ！
Beau ciel, vrai ciel, regarde-moi qui change!

静止した太陽を頂点として円蓋をなす天空の下、この自然世界という寺院の中で、詩人は「秘密の変容」となる。（第78詩句）

お前の内で、私は秘密の変容となる
Je suis en toi le secret changement

そして、死者たちの家たる墓の上を、詩人の影が通過する。（第35詩句）

死者たちの家々の上を、私の影が通過する
Sur les maisons des morts mon ombre passe

それは、生の過程にある詩人の変化を表している。そして、この詩によって明らかにされた自然世界と、移り行く人間の生の実相の一面といえよう。

まとめ

詩的言語の省察から、20世紀フランスを代表する詩人ポール・ヴァレリーは、詩語に典型的に見られる性質であるとともに、言語活動一般を可能ならしめる仕組みとして、言語のもつ「移行性」を見出した。何につけ厳密さを求めた若き日のヴァレリーは、この詩語のもつ曖昧さに幻滅を覚えて詩作を放棄し、さまざまな思索を重ねる日々を送った。その思索の跡である『カイエ』*Les Cahiers*には、言語の「移行性」についても、その具体的諸相を記録した。彼はその特徴を自家薬篭中のものとして駆使すべく、一度放棄した詩作を自らに課す訓練の一種として再開し、矛盾に満ちた言語の「移行性」から目を逸らすことなく考察を深め、幾多の名詩を紡いできた。

『海辺の墓地』では、そのような言語の「移行性」を逆手に取り、その「移行性」を剥き出しにするかのように、意図的に多義的な象徴言語を駆使し、絶えず変化する多層的な

詩的世界を表わすと同時に、詩の構造そのものにおいても、無限の反復運動を惹起する連環的構造を企んだのであった。

その結果としてこの詩では、言葉の内部と外部で無限に続く移行の過程において、一見、移行そのものが停滞する、そんな静止的印象を生み出す2つの特権的な場面が描かれることになった。そのひとつは、反復の永遠性が元となって生じる全体性の印象において効果として生まれる静止であり、他方は、多方向の力が極限状態で調和に達した瞬間に訪れる静止である。いわば反復的永遠性の静止と、調和的静止とである。

言語のもつ「移行性」、またそれゆえにもつ曖昧さを逆手に取り、それらがもつ詩的可能性そのものを結晶化させたものが、この詩であるといえよう。

ヴァレリーの思索は、恐ろしく抽象的であるとともに、彼自身の実存的生とも深く関わっている。彼が言語の本質として見出した「移行性」の概念は、一方で彼自身の考える、人として生きることの本質から滋養を得ている。その意味で、人間の知性のドラマを描いた『テスト氏』連作や『若きパルク』における人間の意識の薄明の領域と、「移行性」の概念や、その「滞留」の概念との関わりについても、さらに考究を進める必要があるだろう。今後の課題である。

註

* 論究の対象としたPaul Valéry, *Le Cimetière marin*を、本文での引用詩句の参照の便宜のために、各詩句に番号を付して、表にして以下に示す。

Paul Valéry, *Le Cimetière marin*

1	Ce toit tranquille, où marchent des colombes,
2	Entre les pins palpite, entre les tombes;
3	Midi le juste y compose de feux
4	La mer, la mer, toujours recommencee
5	O récompense après une pensée
6	Qu'un long regard sur le calme des dieux!

7	Quel pur travail de fins éclairs consume
8	Maint diamant d'imperceptible écume,
9	Et quelle paix semble se concevoir!
10	Quand sur l'abîme un soleil se repose,
11	Ouvrages purs d'une éternelle cause,
12	Le temps scintille et le songe est savoir.

13	Stable trésor, temple simple à Minerve,
14	Masse de calme, et visible réserve,

15	Eau sourcilleuse, Oeil qui gardes en toi
16	Tant de sommeil sous une voile de flamme,
17	O mon silence! ... Édifice dans l'ame,
18	Mais comble d'or aux mille tuiles, Toit!

19	Temple du Temps, qu'un seul soupir résume,
20	À ce point pur je monte et m'accoutume,
21	Tout entouré de mon regard marin;
22	Et comme aux dieux mon offrande suprême,
23	La scintillation sereine sème
24	Sur l'altitude un dédain souverain.

25	Comme le fruit se fond en jouissance,
26	Comme en délice il change son absence
27	Dans une bouche où sa forme se meurt,
28	Je hume ici ma future fumée,
29	Et le ciel chante à l'âme consumée
30	Le changement des rives en rumeur.

31	Beau ciel, vrai ciel, regarde-moi qui change!
32	Après tant d'orgueil, après tant d'étrange
33	Oisiveté, mais pleine de pouvoir,
34	Je m'abandonne à ce brillant espace,
35	Sur les maisons des morts mon ombre passe
36	Qui m'apprivoise à son frêle mouvoir.

37	L'âme exposée aux torches du solstice,
38	Je te soutiens, admirable justice
39	De la lumière aux armes sans pitié!
40	Je te tends pure à ta place première,
41	Regarde-toi! ... Mais rendre la lumière
42	Suppose d'ombre une morne moitié.

43	O pour moi seul, à moi seul, en moi-même,
44	Auprès d'un coeur, aux sources du poème,
45	Entre le vide et l'événement pur,
46	J'attends l'écho de ma grandeur interne,
47	Amère, sombre, et sonore citerne,
48	Sonnant dans l'âme un creux toujours futur!

49	Sais-tu, fausse captive des feuillages,
50	Golfe mangeur de ces maigres grillages,
51	Sur mes yeux clos, secrets éblouissants,
52	Quel corps me traîne à sa fin paresseuse,
53	Quel front l'attire à cette terre osseuse?
54	Une étincelle y pense à mes absents.

55	Fermé, sacré, plein d'un feu sans matière,
56	Fragment terrestre offert à la lumière,
57	Ce lieu me plaît, dominé de flambeaux,
58	Composé d'or, de pierre et d'arbres sombres,
59	Où tant de marbre est tremblant sur tant d'ombres;
60	La mer fidèle y dort sur mes tombeaux!

61	Chienne splendide, écarte l'idolâtre!
62	Quand solitaire au sourire de pâtre,
63	Je pais longtemps, moutons mystérieux,
64	Le blanc troupeau de mes tranquilles tombes,
65	Éloignes-en les prudentes colombes,
66	Les songes vains, les anges curieux!

67	Ici venu, l'avenir est paresse.
58	L'insecte net gratte la sécheresse;
69	Tout est brûlé, défait, reçu dans l'air
70	A je ne sais quelle sévère essence ...
71	La vie est vaste, étant ivre d'absence,
72	Et l'amertume est douce, et l'esprit clair.

73	Les morts cachés sont bien dans cette terre
74	Qui les réchauffe et sèche leur mystère.
75	Midi là-haut, Midi sans mouvement
76	En soi se pense et convient à soi-même
77	Tête complète et parfait diadème,
78	Je suis en toi le secret changement.

79	Tu n'as que moi pour contenir tes craintes!
80	Mes repentirs, mes doutes, mes contraintes
81	Sont le défaut de ton grand diamant! ...
82	Mais dans leur nuit toute lourde de marbres,

83	Un peuple vague aux racines des arbres
84	A pris déjà ton parti lentement.

85	Ils ont fondu dans une absence épaisse,
86	L'argile rouge a bu la blanche espèce,
87	Le don de vivre a passé dans les fleurs!
88	Où sont des morts les phrases familières,
89	L'art personnel, les âmes singulières?
90	La larve file où se formaient les pleurs.

91	Les cris aigus des filles chatouillées,
92	Les yeux, les dents, les paupières mouillées,
93	Le sein charmant qui joue avec le feu,
94	Le sang qui brille aux lèvres qui se rendent,
95	Les derniers dons, les doigts qui les défendent,
96	Tout va sous terre et rentre dans le jeu!

97	Et vous, grande âme, espérez-vous un songe
98	Qui n'aura plus ces couleurs de mensonge
99	Qu'aux yeux de chair l'onde et l'or font ici?
100	Chanterez-vous quand serez vaporeuse?
101	Allez! Tout fuit! Ma présence est poreuse,
102	La sainte impatience meurt aussi!

103	Maigre immortalité noire et dorée,
104	Consolatrice affreusement laurée,
105	Qui de la mort fais un sein maternel,
106	Le beau mensonge et la pieuse ruse!
107	Qui ne connaît, et qui ne les refuse,
108	Ce crâne vide et ce rire éternel!

109	Pères profonds, têtes inhabitées,
110	Qui sous le poids de tant de pelletées,
111	Êtes la terre et confondez nos pas,
112	Le vrai rongeur, le ver irréfutable
113	N'est point pour vous qui dormez sous la table,
114	Il vit de vie, il ne me quitte pas!

115	Amour, peut-être, ou de moi-même haine?

116	Sa dent secrète est de moi si prochaine
117	Que tous les noms lui peuvent convenir!
118	Qu'importe! Il voit, il veut, il songe, il touche!
119	Ma chair lui plaît, et jusque sur ma couche,
120	À ce vivant je vis d'appartenir!

121	Zénon! Cruel Zénon! Zénon d'Êlée!
122	M'as-tu percé de cette flèche ailée
123	Qui vibre, vole, et qui ne vole pas!
124	Le son m'enfante et la flèche me tue!
125	Ah! le soleil ... Quelle ombre de tortue
126	Pour l'âme, Achille immobile à grands pas!

127	Non, non! ... Debout! Dans l'ère successive!
128	Brisez, mon corps, cette forme pensive!
129	Buvez, mon sein, la naissance du vent!
130	Une fraîcheur, de la mer exhalée,
131	Me rend mon âme ... O puissance salée!
132	Courons à l'onde en rejaillir vivant.

133	Oui! grande mer de delires douée,
134	Peau de panthère et chlamyde trouée,
135	De mille et mille idoles du soleil,
136	Hydre absolue, ivre de ta chair bleue,
137	Qui te remords l'étincelante queue
138	Dans un tumulte au silence pareil

139	Le vent se lève! ... il faut tenter de vivre!
140	L'air immense ouvre et referme mon livre,
141	La vague en poudre ose jaillir des rocs!
142	Envolez-vous, pages tout éblouies!
143	Rompez, vagues! Rompez d'eaux rejouies
144	Ce toit tranquille où picoraient des focs!

（1） Paul VALERY, *La Jeune Parque, in OEuvre I*, Introduction biographique par Agathe Rouart-Valéry, édition établie et annotée par Jean Hytier, Bib. de la Pleiade, 1975. pp. 97-110

（2）およそ、1892年（「ジェノアの夜」事件）から1917年（『若きパルク』初出）にかけてのことである。

（3）参考文献（3）参照

（4）同上
（5）同上
（6）Paul VALERY, *La Soirée avec Monsieur Teste, in OEuvre II*, Édition établie et annotée par Jean Hytier. Bib. de la Pléiade, 1970. pp. 15-25
（7）Paul VALERY, *Les Cahiers*. passim.

参考文献

(1) ポール・ヴァレリー「言語」（佐藤正彰・寺田透訳）、『ヴァレリー全集カイエ編 2 言語　哲学』（筑摩書房、1982）、pp. 1-149

(2) ポール・ヴァレリー「哲学」（寺田透訳）、『ヴァレリー全集カイエ編 2　言語　哲学』（筑摩書房、1982）、pp. 151-609

(3) 天野利彦『ヴァレリー言語思想の一面（言語活動における「移行性」と異質性）』、日本記号学会編『都市・建築・コスモロジー』（記号学研究 9，1989）、pp. 191-204

(4) Gérard Genette, 《Langage poétique, poétique du langage》, in *Figures II*, Paris, Éditions du Seuil, Collection Points, 1969

(5) Albert Henry, *Langage et Poésie chez Paul Valéry: Avec un Lexique des Œuvres en Vers,* Paris, Mercure de France, 1952

(6) Daniel Oster, Monsieur *Valéry: essai*, Paris, Éditions du Seuil, 1981

(7) Jurgen Schmidt-Radefeldt, *Paul Valéry: linguiste dans les Cahiers*, Paris, Éditions Klincksieck, 1970

(8) Paul Valéry, *Cahiers, vol. 1*, ed. by Judith Robinson, Paris, Gallimard, Bib. de la Pléiade, 1973

(9) *Dissertation sur "Le cimetière marin",*
http://users.drew.edu/mpierett/Fren104/acaamano/index5.htm